

2025年度 入学試験問題

国 語

①

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 問題は、問題一から問題三までです（1頁～17頁）。
4. 解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入してください。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

札幌国際大学
札幌国際大学短期大学部

国語

問題一 以下の文章を読み、後の問に答えなさい。ただし、設問の関係で仮名遣いを変え、一部省略した部分があります。

ここ十年、時国家のみならず奥能登にうかがったおかげで、私はずいぶん新しく勉強をさせていただいたと思っております。奥能登の方々自身の認識は決してそうではないと思いますが、恐らく現在の日本人の多くの方々の常識では、能登という地域は田島が少なく、しかも時国家が祖先と言い伝えておられる平時忠のように、能登は流人の配流地なので、中央からはるかに離れた後進的な地域である、そういう風土の中から、時国家のようにたくさんのお奉公人を従えた、古い農業の経営形態を残した家がある、というイメージをおもちの方が多いのではないのでしょうか。実は私自身も、能登に来るまでは、そう思い込んでおりました。初めて千枚田を拝見すると、やはり能登には田地が少ないのだなということを感じました。

I 現状では、大変交通が不便という印象を、失礼ではありますが、持たざるをえないわけです。しかし、しばらくこの時国家の調査を通じて能登の実態を調べておきますと、このような見方が全く誤っているということに、私自身はつきり気がつくようになりました。確かに能登、とくに奥能登には、「頭振」とよばれる水呑がたくさんおります。持高（石高）のない、言い換えれば土地をほとんど持たない百姓——一般には水呑百姓といいますが、その水呑百姓の数が非常に多いのです。ふつうは、五反百姓がどうやら経営を維持できる規模と言われますが、土地を一反ぐらいしか持たない（持高一石前後の）百姓もずいぶんたくさんいます。こう聞きますと、能登は貧しい所ではないかと、普通の人は考えてしまうと思います。

II、こういう村が奥能登にはあります。この村は全家族の七一パーセントが水呑百姓、残りの二九パーセントの百姓はみんな持高が三、四石ぐらい、つまり平均三、四反ぐらいしか土地を持っていない人たちから成り立っているのです。もし何の予備知識もなく、私が江戸時代の専門家に質問したとしますと、その専門家は多分、その村は大変貧しい村だろうなあ、と仰しやるでしょう。これが現在の常識だと思います。

III、実はこの人口構成は、奥能登最大の都市・輪島の、享保頃の状況なのです。私たちは水呑といいますが、石高〓土地を持たない、貧しい農民、と考えてしまいます。現在、高校で最も多く使われています山川出版社の日本史の教科書（一九九一年）にも、水呑とは貧しい農民であると書いてあります。確かに、石高〓土地を持たない人たちはひどく貧しいという感じ方は、日本人がひろく持っているところですが、実は輪島の頭振は、土地を持たないのではなく、土地を持つ必要の全くない人たちで

あると考えなくてはならないのです。つまりその実態は商人や廻船人なので、実際、輪島の商人の中には北海道〓松前まで行って、交易をしている者もずいぶんおりますし、漆器はもちろん、素麺も中世から大変有名な地域であり、頭振の中には、そういう職人・商人も多いのです。そういう人々は、土地を持つ必要がない、或いは土地はごくわずかしか持っていないでも十分に生活ができる人たち、つまり都市民、町の人々そのものなのだから、言うことができます。いうまでもなく、貧しいどころか、輪島の町は非常に豊かな、奥能登最大のお金持ちの都市であったわけです。しかし、先程のように、水呑七一パーセント、三反百姓二九パーセントと言うと、ふつうの日本人はどうしても、貧しいと思いがちです。この間違いをはつきり改めなくては、奥能登のみならず、日本の社会全体を正確に捉えることはできないのではないかと、この頃考え始めたわけです。

いまでも、山奥で黍や粟や稗しか食べられない所だと言いますと、なんとなく貧しい所という印象を私たちはもってしまいます。ところが、山の中で米の食えない所という言い方をされる地域が、実は材木などで大変豊かな家のあるケースがいくらかもあるので、山の中の貧しい村とというような考え方は軽々しくしてはならないのです。同じように、海に面した所も田島はごくわずかしか持っておりません。だから海村は貧しい、漁村は貧しいという考え方を、専門の学者の中にも持たれる方がないわけではありませんが、この見方を変えないと、山と海に恵まれた日本の社会を正確には捉えられないのではないかと思います。そういう意味で、百姓を農民と思ひ込み、歴史を見てきた私たちのこれまでの見方は、ずいぶん偏ったものになっていたと言わざるをえません。水呑を貧しい農民と思ひ込んでいますと、とんでもない間違いをおこしてしまうことになる、このことを能登の勉強を通じて、私ははつきりと知ることができました。（中略）

江戸時代にも百姓は農民と考える考え方はありましたが、先程申しましたように、百姓の実態を調べてみますと、「百姓」という分類の中に「農人」という生業がはっきり区別されている例がいくらかあります。百姓の中に農人・船持ち・商人・髪結、そういう人々が含まれている事例は、近世をちよつと専門的に勉強している人には、すぐに目につく筈です。農民を意味する「農人」という語が別にあり、百姓の中には船持ちもいれば、廻船人としてもつばら船で働いている人もいれば、商人、或いは漆器や素麺作りの職人もいます。要するに、田島を若干もって年貢を払っている者、この身分の呼称が百姓なので、この言葉は生業を示す語とは次元の異なる言葉なのです。

そういう見方に立って、これまでの日本の歴史を全面的に見直す仕事をやってみますと、日本の社会が江戸時代までは大体農業を中心にした社会と考えていたことが、大分間違っていたことがわかってきます。私自身も十年ほど前までは、江戸時代をそういう農業社会だと思ひ込んでいたのです。なぜそんな思い込みをしたのかと言いますと、それは人口の八〇〓九〇パーセントが百姓だからなので、百姓イコール農民と考えれば、人口の八〓九割が農民となりますから、当然農業を中心とする社会だということになってしまふのです。

ところが最初に申しましたように、水呑百姓は農民ではなく、むしろ都市の人々が多く、百姓の中にも商人や手工業者が多いし、海の民・山の民もいる、というふうに考えていきますと、農業人口は江戸時代でも、果たして日本の社会の何パーセントを占めていたのかが大きな問題になってきます。厳密な計算はなかなかできないでしょうが、私はおそらく五〇パーセント以下なのではないかと思っています。百姓・水呑のうち半分ぐらいは、農業以外の生業を主に行っている人々だったのではないかと考えられます。また水呑の中にはもつと高い比率で、そうした人々がいたと思いますので、この仮定に基づけば、百姓以外の町人や武士身分を非農業民に加えてみますと、日本の社会における農民人口は、江戸時代でも五〇パーセントをかなり割っていたという考え方も可能であると思います。このことは、数字上の根拠を簡単に示すわけにはいきませんし、多少、言い過ぎがあるとしても、五〇パーセントを大きく出ることではないのではないかと思います。

つまり、江戸時代までの日本の社会は、商工業の要素が非常に強い社会、農業以外の生業の占める比重が大きい社会だったろうと、私は考えているわけです。

(網野善彦『海民と日本社会』より)

- 注1 水呑……水呑百姓。貧しくて水しか飲めないような農民を指す。江戸時代の石高を持たない農民、貧農の呼称。
- 注2 五反……反は尺貫法の土地の面積の単位。一反は約九九一平方メートル。布の大きさを表す単位の反もある。
- 注3 廻船人……主に江戸時代において、港から港へ旅客や貨物を運んでいた船の乗組員や経営者のこと。
- 注4 生業……なりわい。生活するための仕事。

【史料】

瀬戸内海の京都の東寺領の荘園、伊予国弓削島^{ゆげのしま}の鎌倉時代の史料。公物とは年貢として都に送られるもの、預所とは地方の役所のことである(年貢として塩が二百五十俵、都へ送られている)。島の百姓は塩を年貢として負担している。この島の百姓は年貢だけではなく、塩を自分たちで売買して、豊かな生活をしていたことが明らかになってきている。このように、この地域の百姓は、海民、製塩民と考えるべきで、農民と考えるは大変な間違いになる。

伊予国弓削島荘所当等注文案

(端裏書)(越智郡) ○東寺百合文書と函三

「伊予国弓削島所当等注文 延応元年十二月十三日成弘注進之、」

伊予国弓削島

注進 御年貢物事

合

一、公物分

しを二百五十俵 京定納百石^{(俵 以下同ジ) 表別四斗定}

白干のたい百^(罎)こん^(俵) 夏分 あましをのたい百^(俵)こん^(俵) 冬分

かきをけ八^(荒布) 納一斗 くすのこ一をけ

あらめせうく

一、預所得分

しを五十俵 京定納廿石^{表別四斗定}

小古のしを七百三十籠^{籠別一斗国定}

白干のたい百^(俵)こん^(俵) 夏分 あま塩のたい百^(俵)こん^(俵) 冬分

かきをけ十

田三丁三反半^{但たしかの 斗代不知候、} むき十二石^{た、し廿三四石候し}

あみ二帖^{但近代地とうあふ留し 候て一帖のよし承候、} 在家別引出物布一反^{但三ヶ年二 一度也、}

あらめせうく からをせうく あさをせうく

右、太略注進如件、たゝし近代関東の地頭なり候てのちハ、何事もむかしの員数のことくも候はぬよし、うけたまはり候て候、

延応元年十二月 日

問一 空欄ⅠⅡⅢに当てはまる適語を、それぞれア～エから選り記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア 例えば イ つまり ウ しかも エ ところが

問二 波線部 i、ii の語句の意味として適当なものを、それぞれア～エから選り記号で答えなさい。

- | | | | |
|---------------------|--------------------|-----------------------|-----------------------|
| i 痛感…… | ア 刺激が強く痛いほどの辛さのこと。 | ii 予備知識…… | ア 専門外のことならに備えておくべき知識。 |
| イ 身にしみて心に強く感じる事。 | | イ ある出来事に対して必要ない無駄な知識。 | |
| ウ 大切な人を失った喪失感のこと。 | | ウ 一般的によく知られている常識的な知識。 | |
| エ あまりに強い痛みに感覚を失うこと。 | | エ 必要に備えてあらかじめしておく知識。 | |

問三 傍線部 A「このような見方」とは、どのような見方か。その説明として適当ではないものを、ア～エから選り記号で答えなさい。

- ア 能登という地域は、田畠が少なく、流人の配流地となるような中央からはるかに離れた後進的な地域だという見方。
 イ 能登という地域は、たくさんの奉公人を従えた、とても古い農業の経営の形態を残した家がある地域だという見方。
 ウ 能登という地域は、土地を持つ必要のない、さまざまな職業人が都市民、町の人々として暮らす地域だという見方。
 エ 能登という地域は、交通が不便な上、土地をあまり持たない水呑百姓の数が非常に多い、貧しい地域だという見方。

問四 傍線部 B「輪島の頭振は、土地を持たないのではなく、土地を持つ必要の全くない人たちであると考えなくてはならない」とあるが、筆者は、どうして「輪島の頭振」は、「土地を持つ必要の全くない人たちである」と考えているのか。本文の言葉を使って、五〇字程度で説明しなさい。

問五 傍線部 C「奥能登のみならず、日本の社会全体を正確に捉えることはできない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なもの

のを、ア～エから選り記号で答えなさい。

- ア 奥能登のように水呑七一パーセント、三反百姓二九パーセントという町は特別なところで、同じような町がほかにもあるとは考えられないから。
 イ 水呑を貧しい農民であると捉えることで、その社会のありさまを見間違ってしまう例は、奥能登だけではなく、ほかにもあると考えられるから。
 ウ 奥能登最大のお金持ちの都市である輪島の町の経済規模を間違えて捉えてしまうと、日本全体の統計にも大きな影響を与えると考えられるから。
 エ 山奥で黍や粟や稗しか食べられないところや、田畠をごくわずかししか持っていない貧しい漁村を、差別的に捉える危険があると考えられるから。

問六 ある生徒が、傍線部 D「次元の異なる言葉」について、以下のようにまとめた。空欄 QⅠⅡ S に当てはまる適語を文中からそれぞれ抜き出ささい。

「QⅠ」という言葉は、QⅡを示す語ではなく、それらを括る SⅠの呼称だということ。」

問七 傍線部 E「日本の社会における農民人口は、江戸時代でも五〇パーセントをかなり割っていたという考え方も可能である」と筆者がいうのはなぜか。その説明として最も適当なものを、ア～エから選り記号で答えなさい。

- ア 町人や武士身分の人々を除外し、百姓の半分くらい、水呑の半分以上は、農業以外の生業を主にしていると考えているから。
 イ 能登地方は天然の良港に恵まれているので、多くの人が漁業や海運業を生業としていたとする方が自然だと考えているから。
 ウ 江戸時代までの日本社会は、商工業の要素が非常に強い社会で、農業以外の生業の占める比重が大きいと考えているから。
 エ 現代の日本社会の職業構成から考えると、江戸時代であっても人口の八～九割が農民だというのはおかしいと考えているから。

問八 次の会話は、この文章を読んだ先生と生徒たちが「史料」について話し合いをしている場面です。会話を読み、後の問①、②に答えなさい。

先生 皆さんに配った「史料」は、伊予国弓削島荘の百姓たちの田畠に課せられている年貢についてのもので、文章にある能登地方とは違いますが、この文章に添えられ、参考資料とされています。「史料」を見て、そこに何が書かれているかを考えてみましょう。「公物分」とは年貢として都に送られる分、「預所得分」とは地方の役所である「預所」や「地頭」の取り分のことです。「廿」は「二〇」です。

生徒A 弓削島は、瀬戸内海にある愛媛県の島ですね。荘園の時代から製塩が盛んだったと書いてありました。

生徒B 島だから、塩・鯛・牡蠣・網・荒布などの海に関するものがいろいろ書かれているね。「荒布」は海藻の名前だ。「くすのこ」からを」はよくわからないな。

生徒C 何だろうね？ でも「島」なんだから、年貢のほとんどが海に関係するものだというのは納得できる。

生徒A ところがこの年貢を納めている人たちも「百姓」とされていた。

生徒C この人たちを「百姓」農民」というくりで考えるのは、筆者が言うように不自然な感じがする。年貢が海に関するものだったことは、お役所もその人たちのことを「海に関する仕事をしている人」と考えているということだね。

生徒A そこからも筆者の論の確からしさが伝わってきます。

先生 いい話し合いになっているようです。『史料』のように、自分の論の根拠になる資料を文章に添えることで、Wが担保され、

Xが増します。さらに読み手が筆者の研究を確認することもできます。この本には、同じ瀬戸内地方ですが、他にも同様の資料がいくつか示されています。

生徒B ところで、「俵・こん・をけ・斗・石・籠・帖・反」って、なんだろう。

生徒A それは数の単位のようなのです。「石・俵・斗」は、お米を量る単位とあったものだし、「反」「帖」は今でも使う布の単位、海苔の単位。そう考えると、「をけ・籠」は、桶とかごを計量器として使ったのだろうって想像できます。

生徒B 「表別四斗定（俵、以下同ジ）」とあるのは、「表」とは「俵」のことで、一俵は四斗という取り決めということかもしれない。

生徒A ということは、「籠別一斗固定」は、「籠」には一斗分入っているということかな。この「史料」、なんかクイズみたいで楽しいね。

生徒C 謎解きはそのくらいにして、話を戻すよ。「しを 二五〇俵」を現代の「一俵＝六〇kg」で考えると、公物分だけで十五トンになるね。さらに預所分の五〇俵は三トンだから、合わせて十八トン。昔の製塩は重労働だったと聞いたことがある。とてもYの片手間にできる仕事だとは思えないな。史料の説明文にあるように、やはり彼らのことは、Zと考えた方がいいと思うな。

先生 皆さん、「史料」からさまざまなことを読み取りましたね。文章と資料の関係を理解して、自分で文章を書く際にもどのような資料を添えると客観性が保証され、説得力が増すかを考えるようになっていくといいですね。

① 空欄W・Xに適当な三字熟語を、会話文の中からそれぞれ書き抜きなさい。

② 空欄Y・Zに当てはまる適語を、それぞれア～エから選び記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア 農民 イ 製塩民 ウ 農業 エ 製塩業

問題二 以下の文章を読み、後の問に答えなさい。ただし、設問の関係で一部省略した部分があります。

泣かないで お嬢さん 雨は過ぎ去る
——ウラジーミル・ハリトーノフ

1 初めてロシアに行った二〇〇二年から二〇〇三年にかけての冬、私はもし日本にいれば成人式の年で大人の仲間入りをするはずだったが、中身はまだとんでもなく子供だった。

2 目的地のペテルブルグへは直行便がなく、いちばん安いチケットがコペンハーゲンにトランジットで一泊する経由便だったので、デンマーク（ハムレットの故郷！）に降りたつてみたいという好奇心と、一泊くらいどうにかなるだろうと安易な気持ちでチケットと宿を予約し成田を発った。海外など中学生のころ英会話教室のキャンプ（つまりそれはリーダーに連れられてぞろぞろ歩く、遠足のようなものだ）でロッキーマ脈に登ったきりまったく行ったことがなかったのに、ロシアに着けばなんとかなると思ひ込んでいた。どうしてそんな自信があったのかはわからないが、ロシアについては文学と語学を通してしか知らず、その無知が逆に私を大胆にしていた。それまでに読み漁った一九世紀の文学作品に登場する厳しい冬の自然や人々の苦悩は、
I 母の故郷である雪国新潟で自分が体験した出来事のように記憶に刻まれていた。新潟に住む米農家の祖父がレフ・トルストイを好きだったせいもあり、『アンナ・カレーニナ』の（注3）リョーヴィンのくだりを読むときも、農作業にこそしむその姿に重なるのは新潟の田んぼにいる祖父だった。読書体験により作られた私の脳内空間では、ロシアは「ほぼ新潟」——すなわち「ほぼ故郷」だったわけである。

3 経由地のコペンハーゲンに到着するともう夜であたりは暗く、タクシーを拾いホテルへ向かった。窓の外を吹き荒れる吹雪が想像以上にすごいので、一晚の滞在とはいえない不安がよぎった。タクシーを降りて両替したばかりの見慣れない貨幣を払いホテルの部屋に入る。ところがふと財布を確認すると残金がほとんどない。たった一泊のトランジットでお金を使うこともあるまいと控えめな額しか両替しなかったのは確かだが、どう考えてもさっきのタクシー料金は相場の倍以上だった。いわゆるぼったくりである。仕方ない。明日は早めに出て電車で空港へ向かう。飛行機にさえ間に合えばいいのだから。

4 この先とりあえず一年間は一時帰国もしないつもりだったので、私はもちろんエコノミークラスの上限二〇キロ満タンの荷物をスーツケースに詰め込んでおり、そのうえカメラや辞書を入れた手荷物も最高に重かった。手荷物を背負い、雪道に足を取られて動こうとしない重量級のスーツケースをうんうんいいながら押し、切符売り場も見あたらない駅で奇跡的に空港行きの列車を見つけて乗り込み、どうにか空港に着いた。

5 「どうなさいました」——Tシャツの上にスーツのジャケットという、ソ連映画からそのまま出てきたような初老の紳士に声をかけられ顔をあげると、私は泣いていた。乗るはずの飛行機がないというだけで、人に心配されるくらい
II 泣いていたのだ。私がチケットを見せると、その人も同じ便だという。ドミートリーと名乗ったそのおじいさんは、バイオリンのケースを担いでいる。さらに周囲にいた数人が、同じ便だと言って集まってきた。彼らの話すロシア語に安堵してよけいに涙が出た。するとドミートリーは「泣かないで、お嬢さん……」というワンフレーズをロシア語で歌った。誰かが「懐かしい歌ね」と笑った。ずっとあとになって知ったが、一九七〇年代にソ連でヒットした歌謡曲だった。

6 ドミートリーは普段ヨーロッパで活動しているバイオリニストで、休暇でペテルブルグの母親のもとへ帰るところだという。その場に集まった人たちも、めいめいが自分の状況を語った。そうこうするうち私たちの便はやはり欠航だという情報が入った。ほとんどの人は、「空港が手配してくれる宿に泊まり、明日の振替便に乗ろう」と判断してカウンターへ手続きに向かったが、私は躊躇した。ペテルブルグでは留学支援センターの人が出迎えてくれることになっている。迎えの人も私の便の欠航はわかっても、どの振替便に乗るかまではわからないだろう。となると翌日着いたところで、一人で空港から市内へ出て寮を探さなくてはならない。携帯電話もインターネットもまだ普及しておらず、市内へのアクセスも不便だった時代である。おまけに私はコペンハーゲンでさえ、いともたやすくぼったくられたばかりだ。心細い。私が、「迎えがきているはずだから、今日じゅうにペテルブルグに行けないかカウンターで訊いてみます」と言うと、ドミートリーは一瞬考えてから、自分も早く母に会いたいから一緒に行こうと言い、私たちは宿泊組と別れた。

7 当日中の到着を希望した人はほかにもいたが、それは容易ではなかった。便が欠航になっている以上、どこかを經由してペテルブルグへ辿り着ける便を探さなければならないが、どの窓口も急ぎの客が長蛇の列を作っている。どうがんばっても私ひとりでは——というより日本のパスポートではどうにもならなかった。ドミートリーはEUのパスポートを持っており、それを使うと魔法のように行列をすり抜けて進める道が開けるのだが、そのたびに「この子は私の連れだ」と説明し、窓口の人が説得されようとされまいと強引に先へ進んだ。結局私たちはまずヘルシンキに飛び、そこから無事ペテルブルグ行き（注5）のアエロフロートに搭乗した。

8 初めて乗ったアエロフロートはかなり小型の機で、がんがんに揺れるなか、クリスマスが近いからと乗客にはシャンパンが振る舞われた。そのときついシャンパンをひとくち飲んで、ドミートリーは「ナーシェー」——これぞ故郷の味、と笑った。ペテルブルグに飛行機が着陸した

問一 空欄 I III に当てはまる適語を、それぞれア～エから選び記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア あたかも イ あからさまに ウ とりわけ エ なるほど

問二 波線部 i 「魔法のように」・iii 「あながち」の使い方が同じ例を、それぞれア～エから選び記号で答えなさい。

i 魔法のように……ア 誰にもできなかったことを彼は魔法のようにやり遂げた。

イ 彼女のダンスはまるで魔法のように美しかった。

ウ 彼に会った瞬間、魔法のように幸せな気分になった。

エ アプリを使ったら、魔法のようにすぐに問題が解決した。

iii あながち……ア たぶん

イ 必ずしも

ウ 同じように

エ もしかすると

問三 波線部 ii 「愉快的習慣」の「愉快」の意味として最も適当なものを、ア～エから選び記号で答えなさい。

ア 仰々しい

イ 苦々しい

ウ 懐かしい

エ 恥ずかしい

問四 傍線部 A 「中身はまだとんでもなく子供だった」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、ア～エから選び記号で答えなさい。

ア わずかな知識と経験だけを頼りに何とかなると大胆な行動に出てしまったが、この大胆さが周囲には配慮に欠けた幼稚な行為と思われていたということ。

イ 幼いころから故郷で家族に見守られながら過ごしてきた自分が、こうやって今も誰かに支えられながら生きているのだと実感しているということ。

ウ 読書体験により故郷の新潟とロシアを重ねて捉えるようになった自分にとって、ロシアへの旅行は気軽なものだと安易に思っただけだったということ。

エ 目的地までの旅費は高額なものとなることはわかっていたはずなのに、無計画に旅だつて立ち往生することになった軽率さに気づいたということ。

問五 傍線部 B 「読書体験により作られた私の脳内空間では、ロシアは『ほぼ新潟』——すなわち『ほぼ故郷』だった」と同義となる表現を

10 段落以降から三〇字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六 傍線部 C 「なぜだか『故郷に来た』という錯覚が共存していた」とあるが、どうしてそのような心情になったのか。その説明として最も適当なものを、ア～エから選び記号で答えなさい。

ア ドミートリーとの出会いを通して、まるで故郷の両親のような優しさに触れたことで異国の人々に親近感がもてるようになったから。

イ ドミートリーとの出会いを通して、自分の短絡的な行動や精神面の弱さに気づき、これからの成長のきっかけをもてるようになったから。

ウ ドミートリーとの出会いを通して、異国の地でのアクシデントや治安の悪さに対して耐えることができ自信がもてるようになったから。

エ ドミートリーとの出会いを通して、未知の場所に対する不安が和らぎ、周囲の雪や寒さにも懐かしさを感じられるようになったから。

問七 傍線部X「泣かないで お嬢さん 雨は過ぎ去る」と本文の内容との関係を説明しなさい。なお、以下の条件を満たすこと。

- ① 本文全体の内容を踏まえること。
- ② 「泣かないで お嬢さん」がどのような印象やイメージを読者に与えるかを説明すること。
- ③ 「雨は過ぎ去る」がどのような印象やイメージを読者に与えるかを説明すること。
- ④ 百字以内で説明すること。

【留意事項】条件を満たした説明文を求めています。もし説明が途中となっても条件②③それぞれについて採点をし、部分点を付けます。

問題三 次の問にそれぞれ答えなさい。

問一 次のⅠ～Ⅳの傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれア～エから選り記号で答えなさい。

Ⅰ 国交の正常化が国の経済にコウ影響を与えた

ア 彼は国の発展に大きくコウ献した

イ 彼女はコウ福な気分につつまれた

ウ 私の弟のコウ物は鮭の塩焼きだ

エ 敵のコウ妙な罠にかかってしまった

Ⅱ 彼女の良さを列キヨする

ア 自動車の免キヨを手に入れる

イ キヨ偽の申請をしてはいけない

ウ キヨ動不審の人物がいた

エ 海底でキヨ大な生物を見た

Ⅲ 昼食のためにお湯をカップ麺にソンいだ

ア オウ来の激しい通りを横切るのは怖い

イ 私たちは自分がスんでいる街が好きだ

ウ 彼女の意見をハシラとして協議をする

エ 彼の言動は業界ではチュウ目的だ

- IV この街の発展は、経済の復コウが鍵を握っている
 ア 観客は試合の終盤で大いにコウ奮した
 イ 新しい薬のコウ果がすぐに現れた
 ウ 彼の長年のコウ績が認められた
 エ そのチームは、相手に強くコウ撃をしかけた

問二 次のⅠ～Ⅲの傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- Ⅰ 彼は問題を冷静に分析して解決に導いた
 Ⅱ 教室の空気を入れ替えるために換気を行う
 Ⅲ 彼の悠長な話し方にはイライラさせられる

問三 次のⅠ～Ⅲの傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- Ⅰ 就職活動でナイテイをもらうのは簡単ではない
 Ⅱ 採用試験に向けて企業研究をニュウネンに行く
 Ⅲ 祖母が入っているカイゴ施設へ見舞いにでかける

國語

問題一

[illegible]

問題二

[illegible]

問題三

問 三	問 二	問 一
I	I	I
		II
II	II	
		III
		IV
III	III	

学 科 名	受 験 番 号	氏 名	総 点